言心先生の中国便り

# 市民社会の役割

2月28日に、中国のネットでCCTV前記者柴静氏が製作した「穹頂之下」(天空の下)という番組が放送された。あまりにも反響は大きくて、24時間の間に約一億の人がこの番組を見た。柴氏は約二年間で自費の約2000万円を使い、中国の大気汚染の酷い現状と海外の状況を取材してこの番組を作ってきた。

数年前、アメリカ駐中国大使館のホームページで北京のPM2・5の実情が公表された。これ以前は、ほぼ全ての中国人はPM2・5が何かということさえ知らなかった。国民の大気汚染に対する関心は高まり、中国の環境保護部はアメリカの「大きなお世話」を批判した。当然、PM2・5が公表される前も、中国の大気汚染は酷い状態で、飛行機の降下困難も時折発生した。その時の航空機のアナウンスはいつも濃霧が原因というものであったが、後にそれは大気汚染が原因であると判明した。

今の中国の大気汚染には、色々の原因がある。例えば、石炭の過剰使用、車の排気ガス、工場の噴煙等である。最近中国の友人が日本に来て、両国の大都市の環境を比べ、なぜ日本の環境がきれいなのかと筆者に聞いた。筆者は、中国は人民社会で、庶民は身の回りの社会環境は国の物、あるいは政府の物で、自分と直接の関係がないと考えるが、日本は市民社会で、市民は色々な面で社会政策に対する発言の権利と関心を持ち、当然環境が自分達と直接に関係あると考えていると分析した。言い換えれば、中国の社会舞台の主役は政府で、民衆は政府の命令に従って動くということである。勿論、主体性がない民衆は環境汚染等の社会問題に関して、自分は被害者であるとしか思わないのである。

柴氏の番組では、北京市民が二、三キロの距離を移動するのに車を使用する割合は約50%である。これは、道路の渋滞と空気の汚染の大きな原因である。筆者は来日した友人に、東京では上場企業の社長でも電車で通勤していると紹介したら、彼らは大変驚いた。

人民社会の形態では、山積みする社会問題は解決出来ない。主体性を持つ人々を中心とした市民社会を建設することこそが、様々な難問を解決する唯一の方法だと思う。